

富山県魚津市

印田近世墓

—発掘調査報告書—

1981

魚津市教育委員会

目 次

I	位置と環境	1
II	調査の契機と経過	3
III	遺 墓	4
IV	遺 物	7
V	ま と め	11
付	魚津市吉野発見の古瀬戸彫骨器	15

例 言

- 本書は魚津市印田（いんでん）地区の圃場整備事業に先だって実施した富山県魚津市印田近世墓発掘調査報告書である。
- 調査期間は昭和 55 年 8 月 25 日から 9 月 5 日までの延 9 日間である。
- 調査主体は魚津市教育委員会（教育長堀川実治）であり、発掘調査は下記の者がおこなった。

○ 予備調査

魚津市教育委員会社会教育課 麻柄 一志

東北大学研究生 松島 吉信（現富山県埋蔵文化財センター）

○ 発掘調査

魚津市教育委員会社会教育課 斎藤 隆

同 麻柄 一志

同 安念 素倫（現小矢部市教育委員会）

黒部市教育委員会社会教育課 桜井 隆夫

- 本書の編集は斎藤、麻柄、安念がおこない、執筆は IV-3 「寛永通宝」、V-2 「死者に錢を持たせる風習について」を斎藤が、その他は麻柄が分担した。

- 本書の作成にあたり下記の方々から御教示を得ている。

富山県教育委員会 橋本 正

富山県埋蔵文化財センター 酒井 重洋、狩野 誠

富山市教育委員会 藤田富士夫

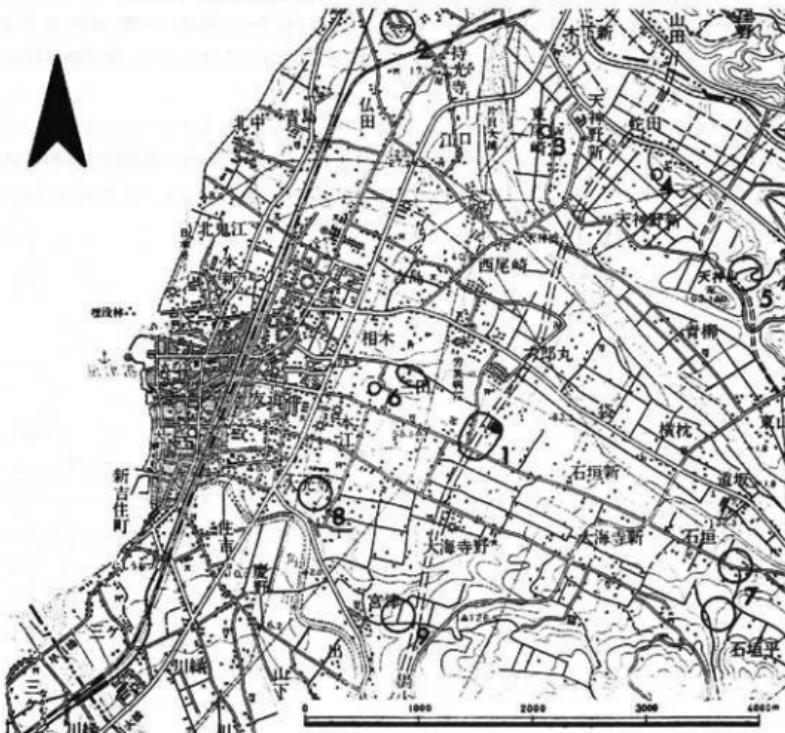
魚津市文化財調査委員 大谷 清瑞、広田寿三郎

高岡高校 京田 良志

I 位置と環境

北アルプスに源を発する片貝川は、名だたる急流で、下流に発達した河岸段丘を形成している。印田近世墓は、この片貝川によって作られた河岸段丘の左岸に位置する標高約73mの洪積台地上に築かれている。印田地区は海岸から約3kmの内陸部で、魚津市のはば中央部にあたる。周囲の洪積台地は古より開田され、やや段差のある水田地帯が広がっている。印田地区は江戸時代以来の純農村で、土地利用は水田を主とし、果樹園、牧草地が混存する。

現在建設中の北陸自動車道魚津インターチェンジを中心とする約20万平方メートルが印田遺跡の範囲と推定されており（第1図1），近世墓は印田遺跡の東北隅に位置する。印田遺跡からはこれまでの調査で、縄文時代中期、晚期、古墳時代中期の遺物と遺構が発見されている。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50000)

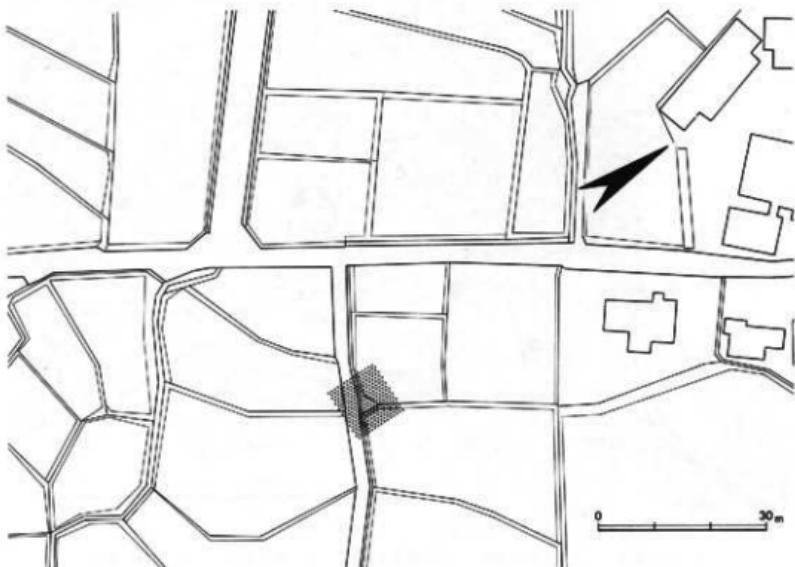
1. 印田遺跡
2. 天王寺遺跡
3. 東尾崎遺跡
4. 蛇田遺跡
5. 天神山遺跡
6. 本江遺跡
7. 石畠遺跡
8. 大光寺遺跡
9. 宮津遺跡

周囲の遺跡としては、同じ片貝川左岸段丘上に石垣遺跡（縄文時代中期～晩期、第1図7）、本江遺跡（縄文時代後期～晩期、第1図6）などがある。右岸段丘上には、東尾崎遺跡（縄文時代中期～後期、第1図3）、蛇田遺跡（縄文時代中期、第1図4）、天神山遺跡（縄文時代中期、第1図5）が存在する。また河口に近い扇状地には、天王寺遺跡（奈良～平安時代、第1図2）がある。

なお、印田地内には中世墳墓と推定される四ツ塚（現在は2基のみ残存）、印田大塚がある。また、東側の石垣遺跡からは昭和46年の富山県教育委員会の発掘調査で、從来から知られている縄文時代のもののはかに中世墓が多数発見されており、珠洲・古瀬戸の藏骨器が出土している。石垣地内には現在も寺院址を推定させる小字等が数多く残っており、中世において大規模な寺院が存在したと考えられている。このほかに本江遺跡からも珠洲焼が出土しており、角川と片貝川に挟まれた通称野方台地は、市内でも最も中世遺跡が多い地区だといえる。

印田近世墓は発見当時、桑などの雑木に覆われておらず、わずかに板碑の一部が顔をのぞかせていたにすぎなかった。付近の住民の中にも近世墓の存在を知る人は少なく、圃場整備計画においても保存、移転等の配慮はまったくはらわれていなかった。

地籍図では、近世墓は約9mの雑地として登録されており、所有者はかつて一帯を領していた大地主である。徐々に周囲の水田が耕作の際に拡大したものと思われ、発掘時には約3mあまりを残すにすぎなかった。また、かつては存在したと考えられる盛土も、発見時にはほとん



第2図 地形図 (1/1000)

ど確認できない状態であった。

印田地区の共同墓地は集落の南部と東部の二ヶ所に分かれている。この近世墓は共同墓地とは関係なく孤立しており、現在の印田地区住民との関連は想定しにくい。また近世墓に関する資料・伝承等は存在していない。

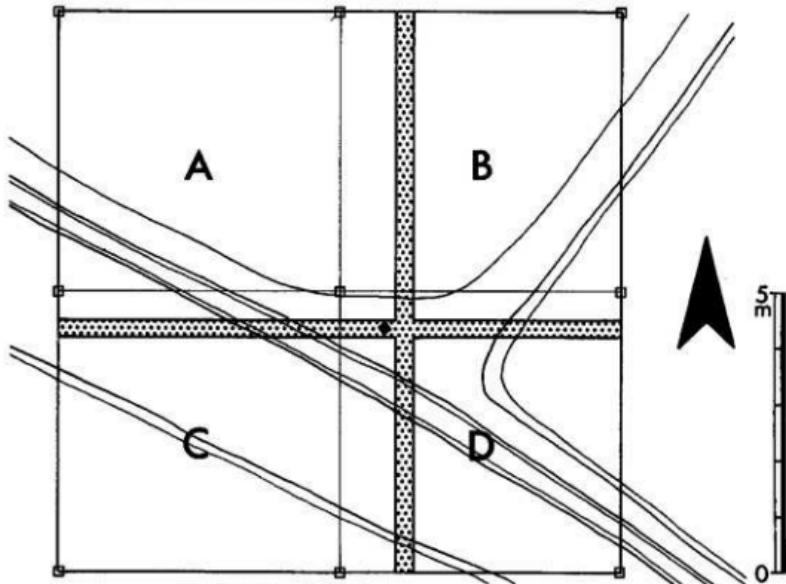
II 調査の契機と経過

1. 調査に至るまで

水田米作地帯である富山平野は、戦後の農業機械化に伴い、大規模に圃場整備がおこなわれている。魚津市内の水田地帯も例外ではなく、沖積平野はもちろんのこと洪積台地までも圃場整備の対象となり、規格化された水田がみごとに並んでいる。

魚津市土地改良区より魚津市教育委員会に昭和 55 年 5 月 10 日付で、印田遺跡周辺地区的圃場整備計画が提出され、それにもとづき魚津市教育委員会では麻病を担当者として、付近一帯の踏査と試掘調査をおこなった。調査期間は同年 5 月 19 日より 5 月 26 日までである。調査では 1 m × 5 m トレンチを 20 本発掘した。

試掘調査の結果、圃場整備の予定地は遺跡の範囲に含まれていないことが判明したが、調査地の水田畦畔上に板石塔婆が発見され、それを中心に小さな塚が存在することがわかった。魚



第3図 グリッドの設定

津市教育委員会では、この板碑と塚は中世墳墓の可能性があると判断し、土地改良区と地元印田地区に現状保存を申し入れた。この申し入れに対して、地元民の理解が得られ、一旦は設計変更で現状保存が検討されたが、土地改良区はこの時点での計画変更には難色を示し、最終的には発掘調査をおこない、記録を保存することになった。

試掘調査期間中に塚の測量図を作成したが、年間発掘予定との調整の結果、発掘調査は、8月以後に行うことになった。なお、試掘調査の期間中に、印田地内に3基の高さ2~3mの塚が存在することが判明した。

2. 調査の経過

発掘対象の近世墓は現状では約3mを残すにすぎなかったが、発掘調査では、一次調査の際おこなった墳丘測量に使用した基準杭を起点として、東西南北にそれぞれ5mのばし、10m四方のグリットを設定した（第3図）。発掘はこの10m四方、つまり100m²の範囲を対象とした。

調査では、大グリットを四分割し、A地区・B地区・C地区・D地区と名づけた。またセクション・ベルトは、南北方向・東西方向の中央部に残した。東西方向のセクション・ベルトは板石塔婆を通した。

発掘面積がほんのわずかであったため、調査は昭和55年8月25日から9月5日までの延9日間の期間で終えることができた。

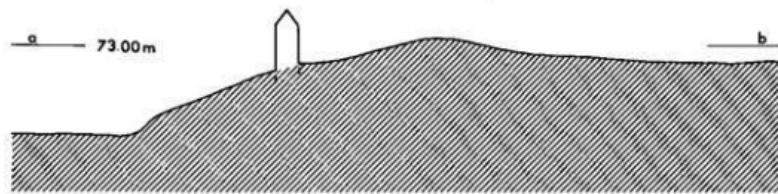
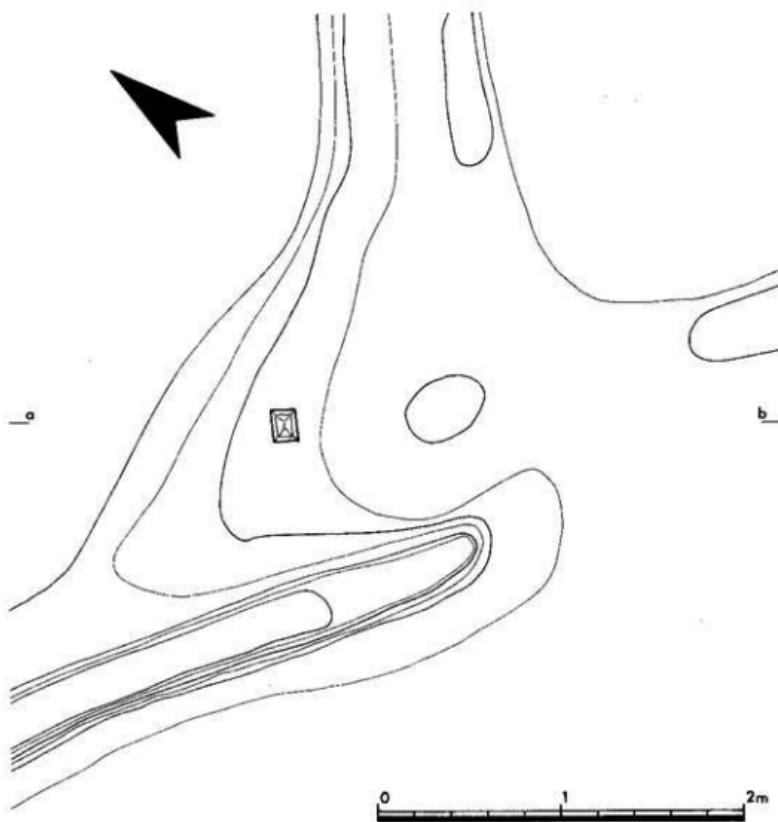
発掘の結果6個の藏骨器が出土した。いずれも破損もしくは破壊していたので、中の骨片は、新らな藏骨器を用意して、印田地区的共同墓地に埋葬した。遺物整理・報告書作成は、他の整理等との調整で昭和56年4月上旬と同年10月におこなった。整理終了後、藏骨器・板石塔婆等の遺物は、魚津市立歴史民俗資料館において保管、展示している。

III 遺構

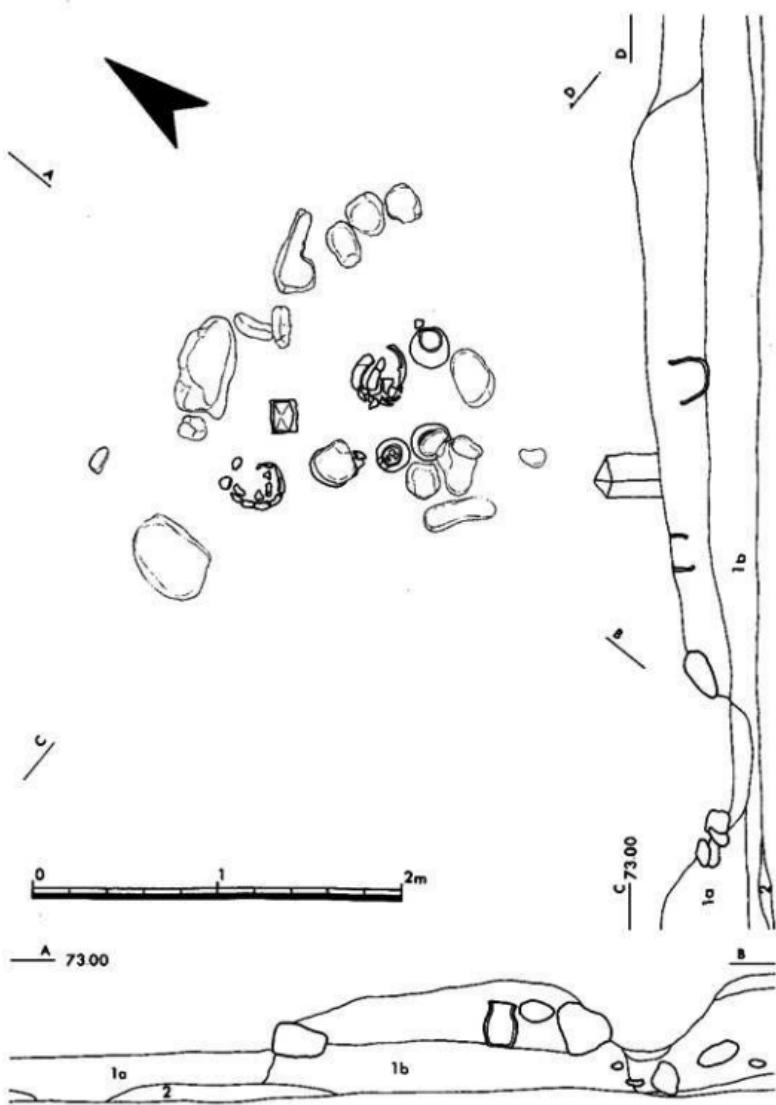
近世墓は水田の畦畔と用水とが交わる地点に位置し、畦畔・用水によって形状はかなり変形させられていると考えられる（第4図）。現状では、東西に約3m、南北に約2mの三角形を呈し、比高は北側の水田面より、約50cmを測る。南は畦畔・農道とほとんど高さが同じで、墳頂部は削平されている。

墳頂部から25cm下がった西側に板石塔婆が立てられている。板石塔婆は地上から約30cm上に出ており、地下に15cmばかり埋っている。あまり固定されているとはいえない。この板石塔婆が、近世墓造営時からのものと判断できない。

墳丘は、暗褐色のやや砂混りの盛土からなっており、一部の裾の部分には15~30cmの礫によつて縁どりがなされている。盛土は一層しかみとめられなく、藏骨器もこの層から出土しているが、掘り方は不明である。また盛土中には、礫・打製石斧・縄文土器等が存在したが、いずれも盛土の際の混入であろう。



第4図 近世墓測量図



第5図 遺物出土状態

IV 遺 物

近世墓内の遺物としては、6点の藏骨器、3点の杯形土器利用の藏骨器蓋、板石塔婆1点がある。また、周辺からは陶磁器、縄文土器、打製石斧が出土している。

1. 藏骨器

1号藏骨器（第8図2, 図版5-1）

器高22.6cm, 最大径22.2cm, 口径16.1cm, 底部径16.7cmを測る。破損が著しく、口縁部は約2分の1が失われている。粘土の輪積痕が明瞭に残る。外面はナデによって調整されているが、内面は粗いロクロによるヘラ削りのままである。底部は糸切り痕が残る。色調は明るい灰褐色で釉は施されていない。出土状態は、胴上半部がつぶれており、器内の火葬骨の上に蓋として利用されていたと考えられる土師質小皿が逆さまに置かれていた。さらにその上に蓋として自然石を半割したものが乗せられている。

1号藏骨器蓋【土師質小皿】（第8図1, 図版7-1）

藏骨器の内部から出土。口径12.9cm, 高さ3.1cm, 底部径5.4cmを測る。底部は回転糸切り。内外面ともにナデ調整。胎土は精緻で焼成は良好。赤褐色を呈する。外面には墨書がみとめられるが、破片がかなり不足しており、判読できる文字は「光」のみである。なお、蓋の口径は、藏骨器の内部口径より小さく、もともと、藏骨器の内部に蓋がおかれていたものと思われる。

2号藏骨器（第8図5, 図版5-5）

ほぼ完形で出土。1号藏骨器と同様に器内に蓋が没している。器高23.0cm, 最大径20.9cm, 口径14.4cm, 底部径14.1cmを測り、底部は糸切底。器形は藏骨器の中でも長胴といえる。全体にロクロ痕が看取できるが、内外面ともにナデで調整されている。黄褐色を呈し、釉は施されていない。胴部外面には墨書がみられ、文字は次のように読むことができる。

一 心 頂 神 萬 德

釋迦如來

身 □ 舍 利

本 地 法 心

廣 川 露 流 信 女

大谷清瑞氏の御教示によれば、「これは「舍利礼」もしくは「舍利礼文」と呼ばれるもので、一心頂礼、萬徳円満、釈迦如來、真身舍利、本地法身、法界塔婆、我等礼敬と続くものである」とのことである。多少の違いはあるが、2号藏骨器の胴部墨書もこの「舍利礼」と考えてよい。なお、最後の「広川？？信女」は被葬者の法名であろう。

2号藏骨器蓋【土師質小皿】（第8図4, 図版7-3）

口径13.6cm, 器高3.8cm, 底部径6.3cmを測り、底部は糸切り。色調は赤褐色で堅く焼成は

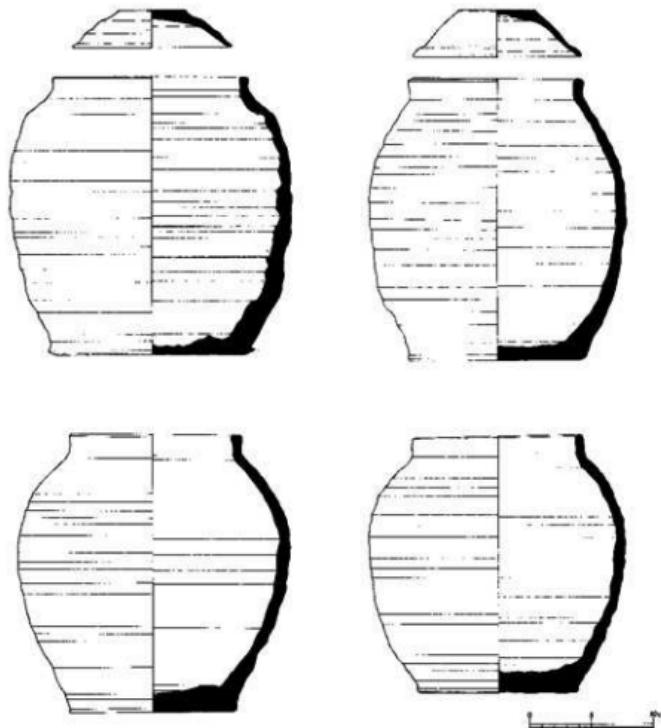
良い。この土師質小皿も内面に墨書がみられるが、消えかかっており判読はできない。

3号藏骨器（第6図3、図版5-2）

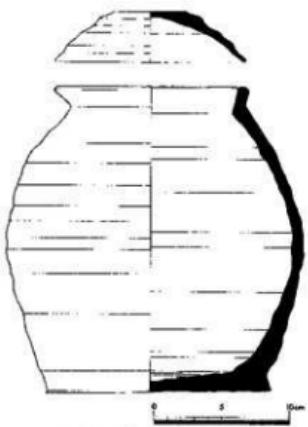
ほぼ完形で出土。蓋として扁平な自然石を用いている。器高は22.6cm、最大径22.1cm、口径14.0cm、底部径13.5cmで系切底。内外面に暗褐色の鉄釉が施されている。胴部にロクロ痕が明瞭であるが、内外面ともにナデで調整されている。

4号藏骨器（第6図6、図版5-3）

発掘時においては蓋は存在していない。器高20.6cm、最大径20.8cm、口径14.0cm、底部径13.2cmを測る。内外面ともに鉄釉がかけられており、暗褐色を呈している。これもロクロ痕が見られるが、内外面ともにナデ調整である。



第6図 遺物(藏骨器)



第7図 遺物(藏骨器)

5号藏骨器（第7図2, 図版5-4）

完形で出土。蓋として土師質小皿が、器内に落ち込んでいた。器高22.7cm, 最大径22.5cm, 口径14.5cm, 底部径16.6cmを測る。底部は糸切底。釉はかけられていない。内外面ともにナデで丁寧に調整されている。胴部には墨書きがみとめられるが、ほとんど消えかかっており判読できるのは「十二月」のみである。

5号藏骨器蓋〔土師質小皿〕（第7図1, 図版5-4）

藏骨器内から出土。口径は14.2cm, 底部径5.4cm, 高さ3.8cmで底部は糸切り。色調は赤褐色で堅く焼成は良い。この蓋の内面には墨書きはみとめられない。

出土した藏骨器は施釉の有無によって大きく2分することができるが、法量、器形、成形等においてはほぼ同類のものとみなすことができる。施釉のものは、

軸そのものの特徴から「越中瀬戸」と考えられる。立山町越中瀬戸窯跡群の発掘例に、印田近世墓からの出土品に類似するものはみられないが（立山町教育委員会 1979），同窯跡群から採集した破片の中に類例が存在する。また、成形・調整等の特徴も越中瀬戸窯跡群のものに共通し、施釉藏骨器を「越中瀬戸」と考えてよいであろう。施釉のないものに関しても「越中瀬戸」と推定している。

藏骨器のほかに3点の土師質小皿利用の藏骨器蓋が出土しているが、これは藏骨器に較べて色調が濃く、焼成も堅くて良い。また、胎土も砂粒が少なく、藏骨器とは別種のものと思われる。

藏骨器等の年代は、越中瀬戸の編年が確立していないため、詳細は不明であり、現時点では江戸時代を瀬らないとしかいいようがない。

2.板石塔婆

柱状に加工した尖頭の塔婆形のものを板石塔婆という。

印田近世墓では、墳頂よりやや西側に凝灰岩製の板石塔婆が据えられていた。全長は43.5cmで、地上部が25cm、地下に15cm埋られている。色調はやや紫がかった暗灰色で、表面は風化している。正面と両側面が敲打で整形されているが、裏面は粗割りのままである。

正面やや上方に梵字「バン」が刻まれているが、板石塔婆の整形が粗い敲打のままであり、石質がもろい凝灰岩で風化が進み、文字は明瞭に判別できるとはいがたい。

京田良忠氏の御教示によれば、この板石塔婆は新しく考えても室町時代末のもので、江戸時代まで年代を下げることはできないという。埋葬されている藏骨器が江戸時代のものと考えられるため、近世墓が造られた時点、もしくはそれ以後に、近辺の本来の機能を失った板石塔婆が墓標として再利用されたものとみなすことができる。

富山県内では板石塔婆(特に本例のように小形で柱状を呈したもの)が普遍的に分布していることが知られている。魚津市内でも広田寿三郎氏等の調査によって、ほぼ全域に分布することが判明している(魚津市史編纂委員会、1968)。共同墓地や寺社の境内、また道端に五輪塔や石地蔵などと一緒に集められている場合が多いが、本来の供養塔としての意味(京田 1976)が失われ墓標として利用されている例も少なくない。

3. 寛永通宝

納骨時に納めた錢は、出土した6個の臺(便宜No

1～No. 6)中3個内より検

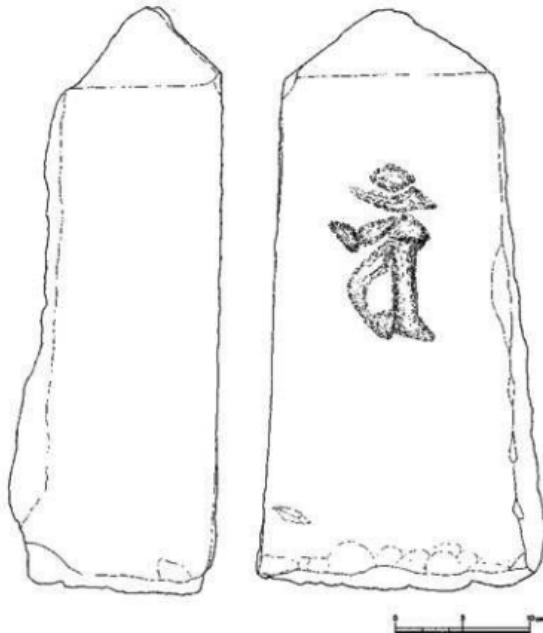
出されており、No. 1より2枚、No. 3より7枚、No. 4より1枚、計10枚である。(図版6)

寛永通宝は収集界で「古寛永」と「新寛永」の二つに区分、明暦までを古寛永(官錢としては寛永13年より20年)、寛文以降(1688年)を新寛永と称する。古寛永が濶字なのに対し、新寛永は細字である。例外はあるが寶の字の足が古寛永ではスのようになっている(ス宝)のに対して、新寛永ではハになっている(ハ宝)。

No. 1よりの2枚確認のうち、1枚は古寛永? 他は新寛永である。古寛永は熱を受けたせいか、「く」の字に曲っている。2枚とも裏面には文字等はない。

No. 3よりは7枚確認しているが、5枚と2枚とに付着している。錢にはわずかであるが布(炭化)の付着が確認される。新寛永が3枚確認されており、そのうち1枚の裏面に「文」の字が確認された。これは文銭と呼ばれ新寛永第一号のもので、江戸亀戸の錢座で大々的に錢造されたもので、鑄造期間は寛文8年(1688年)以降8年間である。

No. 4より1枚確認されており、裏面に文字ではなく書体から、古寛永と思われる。これには布の付着も、熱による変形もみられない。



第8図 板石塔婆

4. その他の遺物

墳丘から出土したものに打製石斧 2 点（図版 7-5・6）と縄文土器片 4 点がある。打製石斧は盛土中の礫群の中から発見されており、縄文土器も盛土中に散在している。いずれも混入とみなすことができる。打製石斧は 2 点とも凝灰岩製で刃部は欠損している。縄文土器は底部（図版 7-4）と胸部破片 3 点で、底部は網代圧痕がみられ、胸部破片は斜縄文のみである。時期は不明である。

墳丘の周辺から出土したものに陶磁器類（26 点）、土師質土器（2 点）がある。墳丘から 2 m 以内にはほとんどの遺物が出土しており、4 m 以上離れるとまったく出土していない。近世墓に何らかの関係がある遺物と思われる。陶器は越中瀬戸と考えられる。土師質小皿は藏骨器蓋に用いられていたものとはほぼ同質のもので、本来は藏骨器の蓋であった可能性が強い。

V ま と め

1. 墓の遺物

印田近世墓の年代は、藏骨器と副葬されていた古銭から江戸時代のものであると判断できる。さらに細かく時期比定すれば、古銭の中に新寛永が含まれることから江戸時代の後半期とみなすことができる。

藏骨器の出土状態は整然と並んでおり、改葬されている可能性がある。しかし、藏骨器内は、火葬骨が頭部を下に詰められており納骨時の状態を保っている。もし改葬されているとしても、藏骨器のまま場所を移動しただけであろう。

富山県では近年中世の火葬墓、墳墓の調査例が増加しているが、近世墓の実態を考古学的に追究した例はない。富山市北代遺跡から江戸時代の藏骨器が出土しているが、1 点の単独出土である（富山市教育委員会 1979）

新潟県内からは近世墓の調査報告が 2 例ある（新潟県教育委員会 1973, 同 1976）。低いながらも墳丘をもつ点と藏骨器に火葬骨を入れる点で、印田近世墓と共通性がある。ただし、新潟県例では古銭の副葬はない。

江戸時代においては全国的にまだ土葬の風習が強かったが、富山県では火葬が一般的になりつつあったようで、農村地帯でも古い墓地には江戸時代の藏骨器が普遍的にみられる。新潟県内においても火葬例がみられることから、北陸地方の特性であったのかもしれない。富山県内の近世墓は、所有者がはっきりしている場合が多く、遺跡として調査が困難である。民俗学的調査との共同作業も今後の課題である。

2. 死者に錢を持たせる風習について

註①

納棺するときは、死者の首から頭陀袋をかけてやることは広くおこなわれる慣行であり、中

にいれるものは次の五項目に大別される。

1. 食料 紙類 旅路の弁当 握飯 味噌 粉糖 茶 煙草等死者の嗜好品
2. 死者の使用したもの 男一煙管、日用品 女一髪道具、菓子
3. 銭 紙や木片で錢形を造って納める例もある。
4. 仏教関係 血脈、数珠、經文

3の銭は六道銭といわれているものであり、死者が三途の川を渡るときの渡し賃だとする解説^③が広くおこなわれており、銭は6文、7文、3文ときには49文入れるところもあって一定しない。銭の形を切った紙片を入れることも多く、明治のころまでは穴あき銭が多く使われていた（井之口 1972）

第一法規、「日本の民俗」によると、この風習は以下、各県があげられる。

北海道（開拓民）、青森、宮城、山形、福島、茨城、新潟、千葉、山梨、岐阜、富山、石川、福井、愛知、三重、大阪、和歌山、広島、島根、山口、徳島、高知、福岡、熊本、大分。

次の各県は少しづつ違っている。

埼 玉-隠し銭と呼ばれる。

群 馬-別に隠し銭を持たせる。

静 岡-最近では紙銭。

兵 庫-1厘銭6枚、又は6文の銭を銀紙でつくる。

鳥 取-1文銭。

香 川-墓掘りのとき六文銭を六地蔵に供える。

佐 賀-昔は1厘銭、6枚とか49枚を添える。

長 崎-閏年は13銭、普通は6文。

宮 崎-三途の川の船賃とは別に小額の金を紙に包む。

鹿児島-穴あき銭。

県内に於いての六道銭の習慣は、県史民俗編（P1081）、「……略……死人は白の着物に数珠、六道銭を持ち……略」に掲載されており、一般的と思われるが、富山県の民俗（1968年）報告中には県内23の調査箇所の中でわずか一例しか報告されていない。一般的と思われ省略されたのか？採集者の関心によるものか定かではない。ともかく焼かれた銭を壺の中にいた例は県内にて報告されたものは初めてと思われる。類例の増加を期待したい。

註1 柳田国男著葬送習俗語彙（1937）によれば、「…略…弁当といつて握飯、山椒の葉、赤味噌、粉糖…略…或は山椒の実と灰糠とを入れ、死人の持物、煙草入れ、煙管、茶、小使銭として六文銭を添える」

註2 この考えも古来の考え方であった気づかいではなく金属片を身辺におく、鎮魂呪術の変形とも考えられている。（井之口 1965, 1977）

註3 周忌に関連すると思われ、一般に偶数が目出たい数字になっているので、但し六の数は六道銭が六文銭と解釈されたと思われる。最近の「冠婚葬祭入門」等は六文銭が古来

からの常識として執筆されているのも、少し問題である。

註4 紙銭を焼く、中国の風習を取りいれたものかもしれない。

秦 六道銭一覧(別表)

以上掲げた表は、一覧とはいえ、まだ不足のものが数多くあり、それとすべて六道銭に基づくものかといえば疑問が残るものもある。古銭の枚数は1枚～38枚とさまざままで「六道銭」といわれる如く6枚とは一定していない。6枚を伴わせることが多くなつたのは、これらの例から室町時代以後と思われ、特に江戸時代に於いて確立されたものと思われる。しかし、当時誰もがこうした銭貨を埋納したか否かは問題が残り、かつ一般的な風習かは疑問であり、今後の課題としたい。

最後に、文献に関しては埋蔵文化財センター、および久々忠義、宮田進一氏より拝借・閲覧した。厚くお礼申し上げます。

秦 一覧表の用語はすべて報告書に従つた。

一 覧 表 文 献

- 1 尾澤 1973 熊本県教育委員会
- 2 清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門塗 1980 熊本県教育委員会
- 3 里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書 1980 熊本県教育委員会
- 4 千塔山遺跡 1978 基山町遺跡発掘調査団
- 5 城の上遺跡 1977 基山町教育委員会
- 6 宋銅錢の我が國流入の端緒 森克己 1950 史源43 続々日宋貿易の研究所収 1975
- 7 東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報 1978 久留米市教育委員会
- 8 板付周辺遺跡調査報告書(3) 1976 福岡市教育委員会
- 9 九州縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX 1978 福岡県教育委員会
- 10 九州縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII 1977 福岡教育委員会
- 11 九州縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIII 1978 福岡県教育委員会
- 12 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集 1978 福岡県教育委員会
- 13 朝田墳墓群I 1976 山口県教育委員会
- 14 朝田墳墓群II・鴻ノ峰I号墳 1977 山口県教育委員会
- 15 下右田遺跡 1978 山口県教育委員会
- 16 大内氏館跡II 1980 山口市教育委員会
- 17 くろかわ 1980 山口県教育委員会
- 18 中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査6 1976 岡山県教育委員会
- 19 中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査7 1976 岡山県教育委員会
- 20 中国縱貫自動車道建設に伴う発掘調査11 1977 岡山県教育委員会
- 21 二宮遺跡 1978 岡山県教育委員会
- 22 福礼古墳発掘調査報告 1973 広島県教育委員会
- 23 西村遺跡II 1981 香川県教育委員会
- 24 大和呉谷発見の蔵骨器 金谷克己 1959 古代33号
- 25 奈良県遺跡調査概報 1979 奈良県教育委員会

- 26 奈良県古墳発掘調査集報 I 1976 奈良県教育委員会
 27 同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査概要 1976 同志社大学校地学術調査委員会
 28 常盤東ノ町古墳群 1977 (財) 京都市埋蔵文化財研究所
 29 細口源田山遺跡中世墓群の調査 1980 第30回石川県五学会連合研究発表会
 30 昭和54年度発掘調査概報 1980 長野県考古学会誌38号
 31 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 1975 長野県教育委員会
 32 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 1972 長野県教育委員会
 33 織河千代遺跡 1979 静岡県教育委員会
 34 陣場上・平陸遺跡 1976 静岡県教育委員会
 35 新潟県中頃城郡金谷草地位墳墓・寺付光明寺・室岡博 1967 日本考古学年報15
 36 新潟県西蒲原郡松尾尼村土葬墓・上原甲子郎 1963 日本考古学年報16
 37 新潟県小千谷市長兵衛塚 中川成夫 1969 日本考古学年報17
 38 長勝寺遺跡 1978 (株) かまくら春秋社
 39 掘り出された鎌倉 1981 鎌倉考古学研究所
 40 海老名市上郷中世墓群調査概報 1980 神奈川県教育委員会
 41 多摩ニムータウン遺跡(4分冊) 1981 (財) 東京都埋蔵文化財センター
 42 松山廐寺 1973 八王寺市寺田遺跡調査会
 43 白井南 1975 佐倉市教育委員会
 44 間野台・古屋敷 1977 間野台・古屋敷遺跡調査団
 45 成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I 1980 (財) 千葉県文化財センター
 46 千葉市城の腰・西屋敷遺跡 1979 (財) 千葉県文化財センター
 47 伊勢塚・東光寺裏 1980 埼玉県教育委員会
 48 高輪寺遺跡 1979 久喜市教育委員会
 49 川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡 1978 上福岡市教育委員会
 50 埋蔵文化財の調査(III) 1981 上福岡市教育委員会
 51 室町時代の円墳式火葬墓 大藤八郎 1959 考古学雑誌45巻2号
 52 下郷 1980 群馬県教育委員会
 53 上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報IV 1978 群馬県教育委員会
 54 辻の内遺跡 1981 栃木県教育委員会
 55 赤塚遺跡 1981 栃木県教育委員会
 56 松葉遺跡 1979 (財) 茨城県教育財團
 57 八幡台遺跡 1980 いわき市教育委員会
 58 東北自動車道遺跡調査報告書II 1980 宮城県教育委員会
 59 東北自動車道遺跡調査報告書III 1980 宮城県教育委員会
 60 東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 1973 宮城県教育委員会
 61 東北新幹線関係遺跡調査報告書III 1980 宮城県教育委員会
 62 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書V 1980 岩手県教育委員会
 63 二戸バイパス開通遺跡発掘調査報告書 1981 (財) 岩手県埋蔵文化財センター
 64 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書III 1980 岩手県教育委員会
 65 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書VI 1980 岩手県教育委員会
 66 永楽通宝を出土した岩手県江利郡玉里村薬師堂山の墳墓調査概報 桜井清彦 1952 考古学雑誌38巻1号
 67 和賀町史 1977 和賀町教育委員会
 68 口内町宝積古墓群の調査 菊地啓治郎 1957 古代23号
 69 後城遺跡発掘調査報告書 1981 秋田市教育委員会
 70 横城通信(第2号) 1981 横城史跡保存会
 71 北海道厚田村墓地 1972 日本考古学年報20

〔付 錄〕

魚津市吉野発見の古瀬戸藏骨器

I 造 跡

魚津市吉野地内に、20年ほど前まで中世墳墓が存在したことはあまり知られていない。北陸自動車道建設に先立ち吉野地内の埋蔵文化財発掘調査を実施していた1979年の夏、発掘作業に従事されていた吉野地区在住の寺西友之氏から、自宅に保管されていた藏骨器と板石塔婆の寄贈を受けた。寺西氏によれば約20年前、寺西氏所有の水田の小規模の圃場整備をおこなった際出土したものであるという。当時、径約5m、高さ約50cmほどの不整円形の小さな塚が水田の一角にあり、その塚上から板石塔婆が、墳丘の中から藏骨器が出土している。現在では一面の水田地帯で中世墳墓の面影すら見うけられない。

吉野中世墳墓は早月上野遺跡の西に隣接し、富山湾を見おろす洪積台地のほぼ中央部に位置する。同じ台地上には、平安時代の大集落佐伯遺跡、中世集落の早月上野遺跡などがある。

吉野中世墳墓には特別な小字あるいは俗称のようなものはない。『角川日本地名大辞典16富山县』(竹内 1979)によれば、吉野地内に“姥塚”といった小字もみられ、かつて吉野地内にもう一基の墳墓が存在した可能性もある。なお、吉野中世墳墓から南東約600mの地点(早月上野遺跡内)が富山県教育委員会の手で発掘されており、古瀬戸の破片が出土している。集落内からの出土であるが、器形は四耳壺であると考えられており、藏骨器の可能性も考えられる。ここにも墳墓の存在が想定できるかもしれない。

II 藏骨器

発掘者の寺西氏によれば、墳丘に埋納されていた藏骨器は2点確認されている。1点は現存する古瀬戸灰釉瓶子で、もう1点は褐色の素焼きのものであったという。褐色の素焼きのものも形態・出土状態などから藏骨器であることは容易に判断できるが、色調などからすれば古瀬戸ではないであろう。その他に、寺西氏によって墳丘内から古瀬戸の破片が採集されているが、器形は広口壺の蓋か盤類であろうと推定できる。

古瀬戸藏骨器は四耳壺が用いられるのが一般的であり、魚津市石垣遺跡出土の古瀬戸藏骨器も四耳壺の頸部を除いて転用している(富山県教育委員会 1972)。吉野中世墳墓出土の藏骨器は瓶子が用いられている。頸部より上は人意的に細かく丁寧に打ち欠かれており、本来



第9回 地 形 (1/5000) 1. 吉野中世墳墓 2. 早月上野遺跡

の口径の約1.5倍に広げられている。

器高は現存部で25.4cm、胸部径17.2cm、底部径は8.3cmを測る。形態は瀬戸灰釉瓶子で最も古い様相を示しており、やや張り出した肩から直線的な胸部が底部に向けて狭ぼまっていく。底部に近い内面では粘土紐の輪積成形が観察できる。整形は内面が粗く、外面は丁寧に横方向でヘラ削りがおこなわれている。

灰釉は全面に薄く灰褐色に塗られ、その上に黄緑色の濃い灰釉が掛けられ、数条が流下している。胎土は非常にきめ細かく、砂粒はほとんど含まれない上質なものである。

器形その他が非常に類似するものとして、「名宝日本の美術12—古瀬戸と古備前—」に掲示されている図版番号35灰釉瓶子(井上 1981)がある。稻崎氏の編年に従えば13世紀後半のものであろう(稻崎 1977)。

この灰釉瓶子と同時に出土している古瀬戸破片は、蔵骨器の蓋として使用されていたものと想定している。出土状態が不明なのが残念である。

破片なので法量は不明であるが、器形は口縁部が屈折し外反する盤形土器になる。屈折部より上は細かく敲打で打ち欠いており、蔵骨器の蓋として二次加工されている。色調は外面が灰褐色、内面が淡緑色で、特に内面はむらなく丁寧に灰釉が塗られている。

現在、富山県下では本例2点を含めて4点の古瀬戸の出土が報じられている。いずれも魚津市内からの出土で、石垣遺跡(富山県教育委員会 1972)、早月上野遺跡(富山県教育委員会 1976)から1例ずつである。

古瀬戸は中世における唯一の施釉陶器であり、そのため需要も上層階級に限定しうるであろう。これはそのまま、吉野中世墳墓の被葬者を意味する。

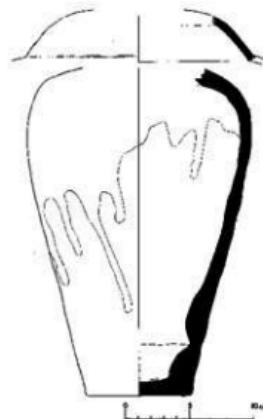
III 板石塔婆

板石塔婆は一点のみ存在していたが、墳墓の上にあったというだけで詳細は不明である。花崗岩製である。

長さ38.2cm、最大巾16.1cm、最大厚17.0cmを測る。長楕円形の川原石を素材としており、両側辺を切断し、正面・裏面は簡単に敲打で整形している。正面下部から底面・裏面に自然面が大きく残る。頭部は段を有して、体部と区別されており、正面が三角形、側面が台形に見えるよう成形している。正面には、梵字が一字刻まれており、パンと読める。

この板石塔婆の年代は不明であるが、中世墳墓に付隨したものであれば、蔵骨器の年代と同年代かそれ以後のものと考えられる。ただし、印田近世墓の例にもあるように板石塔婆の年代と下の墳墓の年代が一致しない場合もありうるので注意を要する。

第10図 蔵骨器



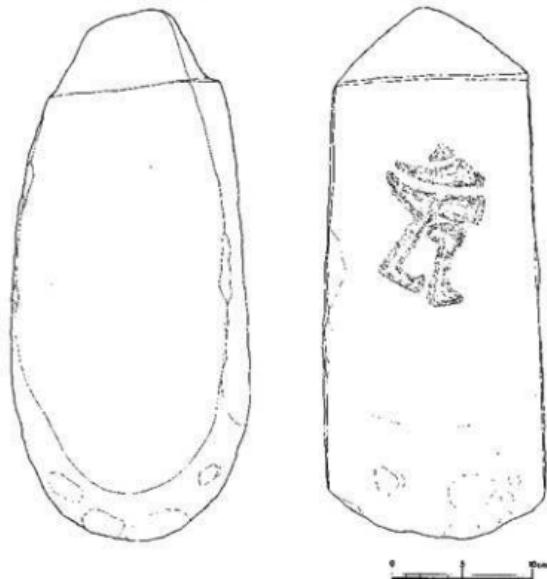
IV まとめ

富山県下では近年、中世墓の発掘調査がさかんにおこなわれており、様々な形態の墓があることが判明している。しかし、まだまだ発見数、調査数ともに不足しており、比較検討できない場合が多い。

中世墓としては、堅穴式石室状のもの（富山県教育委員会 1975），土壙墓、墳丘（塚）をもつものなどと知られる。黒部市神谷堅田遺跡では、土壙墓群の中に2基の墳丘をもつ墓が

造営されており、墳頂部には蔵骨器が埋納されている（桜井 1980）。中世墓の種々の形態は、年代や地域性とかならずしも結びつかず、墓地を造営した集団内の被葬者の位置を示しているものと考えられる。

吉野中世墳墓の場合は、墳丘をもつ点と、蔵骨器に古瀬戸を用いている点で極めて特徴的である。中世の魚津における有力者の墓といえよう。



第11図 板石塔墓

吉野中世墳墓参考文献

- | | | |
|-----------|------|--------------------------------------|
| 井 上 喜久男 | 1981 | 「古瀬戸と古備前」名宝日本の美術12 |
| 桜 井 隆夫 | 1980 | 「神谷堅田遺跡」「昭和54年度富山県埋蔵文化財調査一覧」富山県教育委員会 |
| 竹 内 理 三 編 | 1979 | 「角川日本地名大辞典16富山県」 |
| 富山県教育委員会 | 1972 | 「魚津市石垣遺跡発掘調査概報」 |
| 富山県教育委員会 | 1975 | 「富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報」 |
| 富山県教育委員会 | 1976 | 「富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査概報」 |
| 橋 崎 彰 一 | 1977 | 「瀬戸」「世界陶磁全集3日本中世」 |

六道錢参考一覽

遺跡名	時代	銭	法	通鑑番号	銭鑄所	時代	銭	法	通鑑番号	銭鑄所	時代	銭	法
熊本県尾宿江	食	土	辨	44号基	15	1	神奈川風上野中世墓室	辨	2号通鑑	6			
# 林原新門基江	戸	土	辨	土場内	7	2			1	"	1		
" 里の城室江	戸	土	辨	2号土壙 1号基壙	19	19			7	"	1		
"	"	"	"	2号 "	6				12	"	5		
"	"	"	"	3号 "	2				15	"	1		
"	"	"	"	6号 "	1	3	東京都多摩ニニタク クムル457	室	辨	121号丸机	6		
佐賀県千炳山江	戸	木棺墓	辨	62号墓	5	4			191号丸机	辨	6		
" 城の上江	戸	土	辨	2基あり	12	6枚づつ			土 邦	1号 銀	4	布片が付着	
福岡県黒田家の墓江	戸	土	辨	米俵(長跋の塩)	6		千葉県白神第1地点 土塚墓群	戸	辨	8号 銀	12	6枚銀が2塊	
" 下江	戸	土	辨	5号近世墓	1	1			辨	土辨	5		
" 繁村附近 0-5m地点江	戸	土	辨	2号木棺墓 3号 "	14	(+17枚)			"	土辨	14	1	
" 沙井辨塚發見江	戸	土	辨	1号辨塚	6	8			"	土辨	16	4	
" 宿人冢江	木	火	辨	第5号辨塚	19	骨壺空の感見より出土	9		"	土辨	18	5	
" 音九城南北關～宮町江	戸	火	辨	2号辨	6				"	土辨	19	6	重なつて出土
" 辻田地区墓地江	戸	土	辨	1号近世墓	4	10			"	土辨	21	6	
"	"	"	"	2号 "	1	(+4枚)			"	土辨	23	7	
"	"	"	"	5号 "	5				"	土辨	29	5	
"	"	"	"	6号 "	4				"	土辨	34	4	
"	"	"	"	7号 "	3				"	土辨	36	4	
"	"	"	"	8号 "	6				"	土辨	39	3	
"	"	"	"	11号 "	1				"	土辨	41	5	布で包まれている 底なつて出土
"	"	"	"	12号 "	1				"	土辨	55	6	
"	"	"	"	17号 "	2				"	土辨	58	6	
"	"	"	"	20号 "	4				"	土辨	59	7	
"	"	"	"	29号 "	3				"	土辨	75	6	
"	"	"	"	34号 "	3				"	土辨	79	6	
"	"	"	"	36号 "	2				"	土辨	80	4	重なつて出土
"	"	"	"	37号 "	8	明治4年の墨辨 通宝5枚 文久承宣3枚	12		"	土辨	84	3	
山口県木崎江	戸	9号土塼	1	13					"	土辨	88	7	
" 朝田辨塚 III 地区江	土	辨	58号	1	全体で67基を数える				"	土辨	90	5	
" 下右田家江	戸	土塼	69号	6					"	土辨	100	6	
" 大内氏船跡平安水～飯倉江	?"	土塼	28号	3					"	土辨	106	5	
"	"	土塼	162	5					"	土辨	111	3	
"	"	8号土塼	1						"	土辨	112	3	
"	"	16号 "	1						"	土辨	118	5	
"	"	20号 "	1						"	土辨	121	1	
"	"								"	土辨	122	4	
" 古屋敷室町前期江	土	辨	53号	1					"	土辨	131	2	
"	"			54号	2				"	土辨	132	2	
									"	土辨	133	2	
									"	土辨	134	2	

#	野毛平高台 室	町 火 伸	322 号地	2 製造者は業者は有り が無いといふ事はないでしも
		土 地	135 ㎡	5
	江 戸 初 間	土 地	137 ㎡	5
	江 戸 初 間	土 地	140 ㎡	6
#	西 服 敷 室	町 土 所	285 号地	1 他の市街地は開拓されな いから、人又は物のものが 7 箇 あるを除むるもののが 4 箇
		土 地	365 ㎡	6
	江 戸 初 間	土 地	407 ㎡	2 あるを除むるもののが 2 箇
		土 地	407 ㎡	46 4 箇
#	埼玉県東光寺室	戸 伸	107 ㎡	17 あるを除むるもののが 6 箇
		土 地	6 ㎡	5
		土 地	6 ㎡	5
		土 地	6 ㎡	5
		土 地	11 ㎡	19
		土 地	12 ㎡	17
		土 地	13 ㎡	18
		土 地	14 ㎡	11
#	高 極 寺 室	町 土 所	3	3 体理顕と考えられ ている
		土 地	39 ㎡	3 体理顕と考えられ ている
#	長 宮 江 戸 間	町 火 伸	6	6 体理顕たる状態で 生出地點付
		土 地	39 ㎡	6 体理顕たる状態で 生出地點付
		土 地	407 ㎡	6 体理顕たる状態で 生出地點付
#	法 逸 寺 室	町 火 伸	2	3 4 箇あるが各々の 枚数は不明
		戸 伸	2	枚数は不明
#	新 勝 鳥 住 江 戸 間	町 火 伸	1	1 他に 1 ~ 2 箇程度よ り少く、個人的
		戸 伸	1	1 他に 1 ~ 2 箇程度よ り少く、個人的
#	赤 庫 室	町 土 所	285 号地	1 4 箇に 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	55 55
#	赤 庫 室	戸 伸	3 件地圖	1 2 箇明るい状態で 生出地點付
		土 地	6 ㎡	55 55
#	天 姉 岐 宗 江	戸 伸	9 件地圖	1 1 件地圖と人骨の 出し
		土 地	6 ㎡	54 54
#	福 島 八 塔 台 平 安 木	戸 伸	5 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	56 56
#	福 島 八 塔 台 野 町	戸 伸	5 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	58 58
#	福 島 八 塔 台 野 町	戸 伸	6 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	59 59
#	日 丸 江 戸 間	戸 伸	2 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	60 60
#	福 島 八 塔 台 野 町	戸 伸	0~36 区	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	61 61
#	持 田 旗 住 も う 里 江	戸 伸	0~36 区	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	62 62
#	鈴 ケ 住 江	戸 伸	3 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	63 63
#	長 潟 C 江	戸 伸	450~515 ㎡	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	64 64
#	長 潟 D 江	戸 伸	450~515 ㎡	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	65 65
#	南 間 江 戸 初 間	火 伸	4 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	66 66
#	清 間 江 戸 初 間	火 伸	8 件地圖	1 土 1 枚枚出上
		土 地	6 ㎡	67 67
#	委 金 な ま 岩 岩	江 戸 初 間	火 伸	2 8 件地圖であります その他のものも骨が有 ります
		土 地	2 ㎡	68 68
#	松 田 旗 住 室	江 戸 初 間	火 伸	2 ST 002 であります その他のものも骨が有 ります
		土 地	2 ㎡	69 69
#	宝 保 古 墓 室	江 戸 初 間	火 伸	2 3 件地圖であります その他のものも骨が有 ります
		土 地	2 ㎡	70 70
#	青 烏 旗 住 室	江 戸 初 間	火 伸	2 不明
		土 地	2 ㎡	71 71

遺跡名	時代	釋法	遺跡番号	断面図	備考	文献
北海道上ノ国奥矢山室	火葬	火葬	6号	8		72 北海道棺山郡上ノ国奥矢山遺跡 大塚利夫 1969 日本考古学年報 17
北海道上ノ国奥矢山室	"	"	102号	2		72 札苅遺跡 1974 木古内町教育委員会
北海道札幌市北区室	火葬	火葬	1号土壙	6		73 岩手県イタコ塚 茂山源吉治 1974 日本考古学年報 25
岩手県イタコ塚江戸町	火葬	火葬	方形埴溝	8		73 鹿島町内遺跡発掘調査報告書 I 1980 鹿島町教育委員会
茨城県鹿嶋市旭7室	火葬	火葬	002	2	仙に003,005,006 より人骨出土	74 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III 1975 原経考古資料刊行会
千葉県南総中学	火葬	火葬	第1号塚	19		75 千葉・南総中学遺跡 1978 先史 10号
千葉県南総中学校	江戸?	土葬	1号墓調			76 日本人の骨 筑木 尚 1963
千葉県南総中学校	江戸?	土葬	2号 "	不明		76 前原遺跡 1976 國學院教大考古学研究セミナー
千葉県南総中学校	江戸?	土葬	3号 "	不明		79 前原遺跡・風落古墳地 1980 世田谷区教育委員会
東京都駒沢の墓地	室	土葬	4号 "	6		80 根岸山遺跡・風落古墳地 1980 世田谷区教育委員会
" 駒馬内の守跡	室	土葬				80 海戸・安原寺 1967 長野県考古学会
" 則原	江戸	土葬				81 久津市行拘跡発掘調査概報 1972 富山県教育委員会
" 安藤家墓地	江戸	土葬	土葬	6		82 多倉山遺跡発掘調査報告書 1981 三重県教育委員会
長野県安原寺	火葬	火葬	1号墓	4		83 梶・遠坂と出土品 1976 市川農業協同組合
長野県多賀田	火葬?	火葬?	2号墓	1		84 六道鏡 豊原保明 1975 古代研究 6
富山県石垣室	火葬?	火葬?	土壙1号	12	頭骨付近に6枚 2,3,4号裏り人骨	85 烏根県埋蔵文化財調査報告書等III集 1971 烏根県教育委員会
三重県多賀田	火葬?	火葬?				86 佐藤選信 1974 日本考古学年報 25
大阪府淨光寺本堂	江戸	火葬?				87 阿智赤坂遺跡 1974 大門口遺跡 大沢和夫 1981 日本考古学年報 21, 22, 23
奈良県当麻寺江	火葬	火葬	曲輪形杓	6		88 大門口遺跡 大沢和夫 1981 日本考古学年報 30
鳥取県柳山古墓	江戸	火葬	骨器	6		89 中山5号塚 鶴形鏡 1979 日本考古学年報 25
鳥取県柳山古墓	"	"	細口基	9		90 王孫内の塚 中野国雄也 1974 日本考古学生報 22, 23
鳥取県柳山古墓	"	"	第IV "	9		91 丸山古墳 堀主三郎 1981 日本考古学年報 21, 22, 23
鳥取県柳山古墓	"	"	第XIV "	3		
鳥取県柳山古墓	江戸	火葬	火葬?	6	遺物より真水通宝等	84
長野県阿智赤坂室	火葬	火葬	第2号 "	10		85
" 大門口江戸	火葬	火葬	墓壙	6		86
新潟中山5号塚	江戸	火葬	土塚墓	不	明	87
静岡王塚内の塚	江戸	火葬	土塚墓	6		88
京都府九山古墓室	江戸	火葬	土壙	11		89
						90
						91

引用参考文献

- | | | |
|-----------|------|-----------------------------------|
| 井之口 章 次 | 1965 | 「日本の葬式」 |
| 井之口 章 次 | 1972 | 「六道鏡」『世界大百科事典』 |
| 魚津市史編纂委員会 | 1968 | 『魚津市史上巻』 |
| 大間知馬三 | 1969 | 「人生儀礼」『日本民俗資料事典』 |
| 京田 良志 | 1976 | 『富山の石造美術』 |
| 立山町教育委員会 | 1979 | 『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』 |
| 富山 県 | 1973 | 『富山県史民俗編』 |
| 富山県教育委員会 | 1968 | 『富山県の民俗』 |
| 富山市教育委員会 | 1979 | 『北代遺跡試掘調査報告書』 |
| 新潟県教育委員会 | 1973 | 『西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告』『埋蔵文化財緊急調査報告書第1』 |
| 新潟県教育委員会 | 1976 | 『燕市焼屋敷遺跡発掘調査報告』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第8』 |
| 柳田 國 男 | 1937 | 『葬送習俗語彙』 |



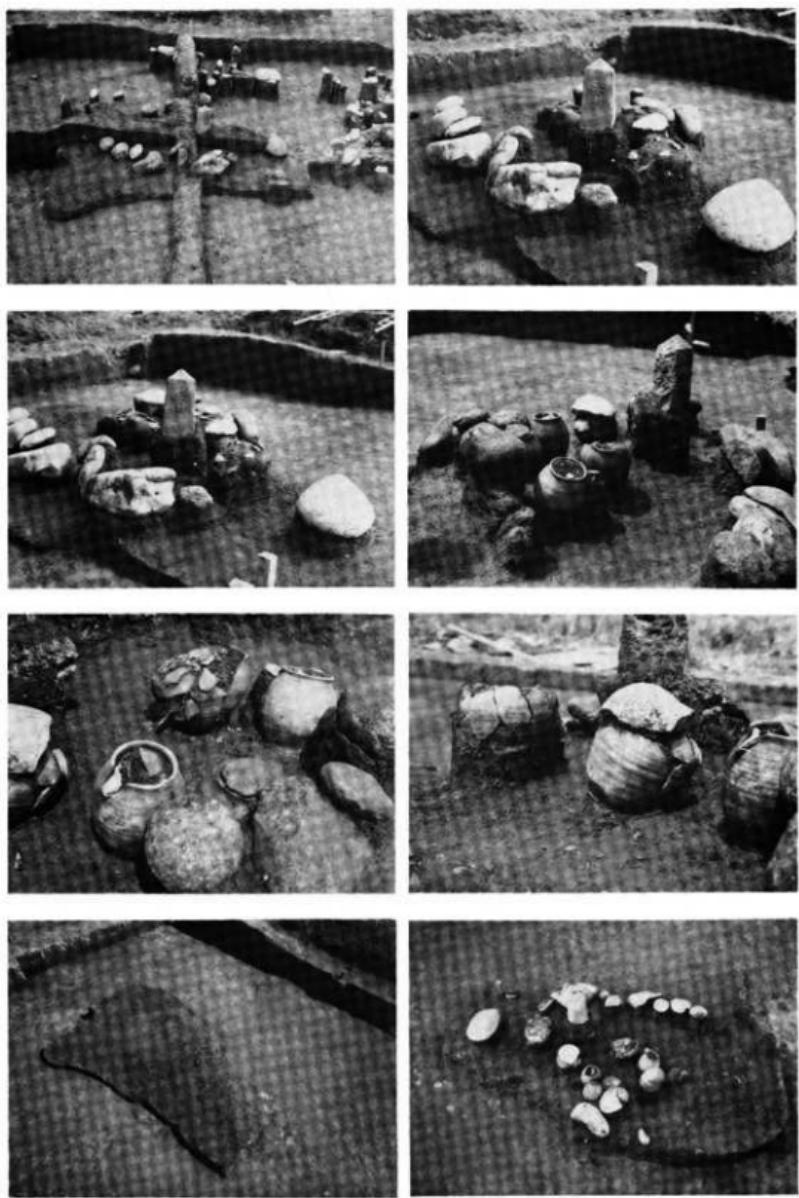
調査前



調査後



發掘風景



遺物出土状態



発掘 実測 その他



1



2



3



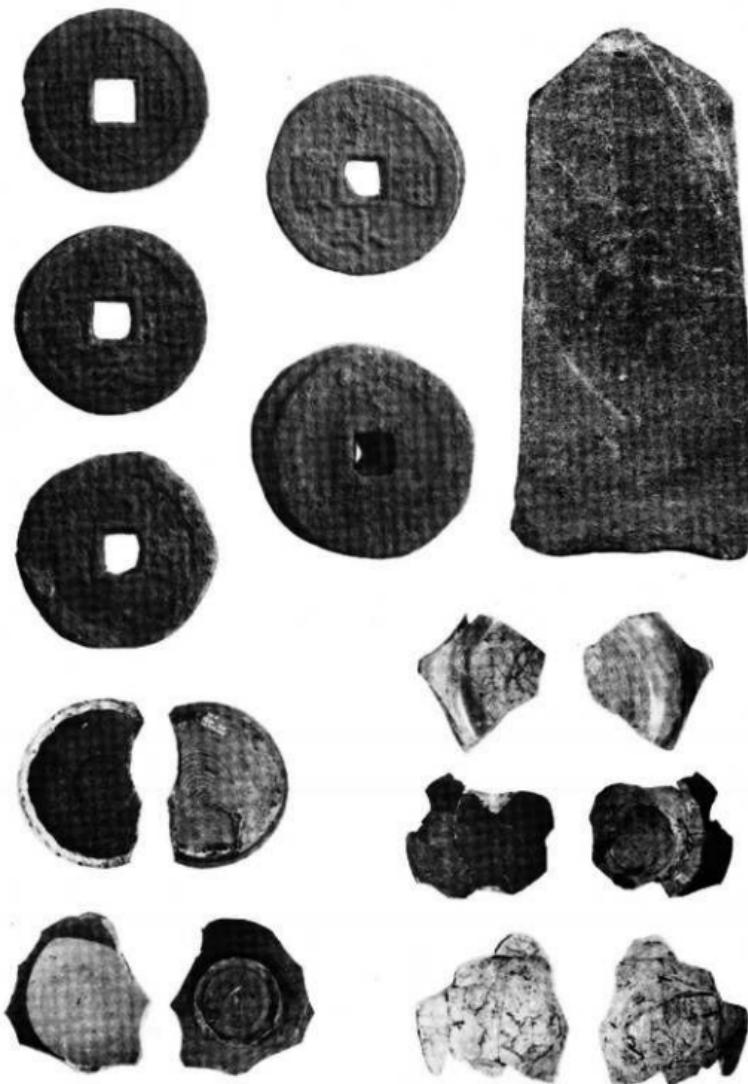
4



5a

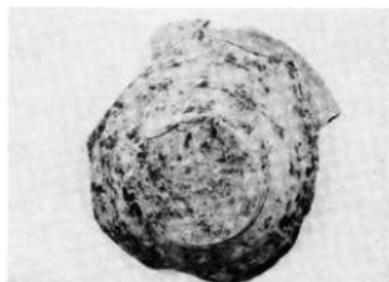


5b





1



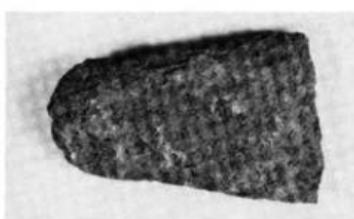
2



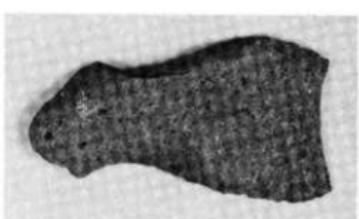
3



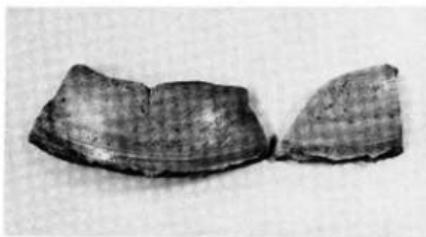
4



5 印田近世墓出土遺物



6



吉野中世墳墓出土の藏骨器蓋
(古瀬戸)



吉野中世墳墓出土遺物（漆骨器、板磚）

魚津市埋蔵文化財調査報告書第8集

富山県魚津市

印田近世墓

昭和56年12月24日印刷

昭和56年12月25日発行

発行 魚津市教育委員会

〒937 魚津市駅前1-10-1

印刷 新誠堂

No.

